



Title	Development of a New Teaching Technique for Better Comprehensibility by Means of Shadowing
Author(s)	新本, 庄悟
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96017
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 （ 新 本 庄 悟 ）	
論文題名	Development of a New Teaching Technique for Better Comprehensibility by Means of Shadowing (シャドーイングを利用した発音の理解のされやすさを高める指導法の開発)
論文内容の要旨 本博士論文の目的は、日本の英語授業において、シャドーイング指導を基軸とし、日本人英語学習者の発音の理解のされやすさ(comprehensibility)を高める指導法を開発することである。本論文の概要を次に述べる。 第1章から2章にかけて、外国語教育における指導法の歴史、流れや各指導法の種類を概観した。まずは、外国語教育が行われ始めた1850年代に主流となっていた訳読読解による指導法についての詳細を述べた。後にその指導法が批判され、新たに様々な指導法が開発・実践されてきた流れをまとめた。具体的には、言語そのものに注意を向けるオーディオ・リンガル指導法から、実際に英語を使用しながら学習を行うタスク中心の指導法や他の科目を英語で学ぶCLILなどについて説明をおこなった。それに加え、日本の英語教育で長年に渡り広く浸透しているPPPスタイルによる指導法に関して述べた。 第2章の後半部分では、現在の発音指導に焦点を充てた。具体的には、外国語で問題なくコミュニケーションを行えることが、外国語学習の究極の目標とされている(Derwing and Munro, 2005)ことに触れた。そのために、自分の発話を相手に問題なく伝達することが重要性を強調した上で、外国語で発話を伝達する際、訛り度合い(accentedness)、聞き取りやすさ(comprehensibility)、発話の明瞭さ(intelligibility)が重要な要素として挙げられる(Hamada, 2017)ことを述べた。先行研究の結果、どれだけ早期に学習を開始しても第一言語の訛りが全く無い第二言語話者は非常にまれであることが分かっており(Abrahamsson & Hyltenstam, 2009)、訛り度合いを消すことは非常に困難である。一方で、聞き取りやすさを高めることは十分に可能である(Saito, 2015c) ことに関して論じた。しかし、聞き取りやすい英語でコミュニケーションを図ることの重要性が指摘されているにも関わらず、日本の英語教育の現場では時間的な制約や指導者側の発音指導への自信の無さなどから発音指導が軽視されていることを述べた。また、聞き取りやすい英語を指導するための効果的な教授法も確立されていたため、日本人英語学習者が聞き取りやすい英語を身に付けるための指導法を検証する必要性を報告した。 第3章においても、日本のような外国語環境においては、訛りのない英語ではなく聞き取りやすい英語を目標とすべきである(Jenkins, 2000)ことを代表的な先行研究を用いて強調した。現在、世界の英語母語話者は非英語母語話者と比較すると圧倒的に少ない。英語の発音に関しては、英語母語話者だけではなく、非英語母語話者に対しても伝わることを目指すことの重要性を論じた。また、母国語の訛りを完全に失くしてしまうのは、自国へのアイデンティティーの消失にもつながる危険性や、ネイティブスピーカーへの過度な崇拝的姿勢に対する批判などの先行研究をまとめた。 第4章では、理解されやすい発音に与える構成要素を詳細に論じた。学習者自身では変えることのできない年齢や適性が発音に与える影響について触れた。一方で、指導者や学習者次第で可変的である指導方法やモチベーションについても述べた。 第5章では、発音に関する評価方法について先行研究などを引用し要約した。日本における従来の発音の測定は、旧センター試験によく見られた発音記号やアクセント問題であることに触れ、その評価方法では実際の英語による発音を測れない事について述べた。それに加えて、現代のテクノロジーの発展を受け、発音評価の自動採点化についても言及した。 第6章では、英語のどのような言語特徴が理解のされやすさに影響を与えるかの先行研究を概観した。大きく分けると、分節音的側面と超分節的側面が与える理解のされやすさの影響が大きいことを論じた。 第7章から8章では、聞き取りやすい英語の発音を高める指導法の一つとして、シャドーイングが挙げられることを論じた。シャドーイングとは、聞こえてくる音声を即座に口頭で再生する方法で、その即時性からオンラインの指導法だと言われている。一方で、聞こえてきた音声を一旦聞いた後に聞かずに自分のペースで口頭再生するリピートイングと呼ばれる指導法はオフラインの指導に分類される。シャドーイングを実施する際は、この即時的性質から現在自分が持つ発音データベースを介することなく、生の英語の音声を発することになる。そのため、このシャドーイ	

ング指導法が聞き取りやすい発音力向上に寄与すると考えられる(Hamada, 2017)ことを理論的背景やスピーチモデルを示し論じた。その上、シャドーイングは教室内において導入しやすい指導法であり、教師側の負担がほとんどない点も強調した。また、数多くの先行研究の結果から、シャドーイングはリスニング力の向上にも貢献すると言われていたので、発音だけではなくリスニング力を同時に向上させる可能性を秘めている点に触れた。それ以外にも、英語を指導する教師側の発音指導に対する自信のなさや発音指導に関する研修やトレーニングが大学の教職課程において圧倒的に不足している点についても言及した。シャドーイング指導は誰でも手軽に導入できる指導法であるため、教師側の負担や心理的プレッシャーを大きく下げることができることについても述べた。その他にも、シャドーイング指導には細かい分類がなされており、各指導法の名称や内容の違いを示した。

第9章では、シャドーイング指導が学習者の心理的側面に与える影響について報告した。先行研究から、シャドーイング指導は学習者のリスニングに対する自己効力感を高め、リスニングに対する不安やスピーキングに対する抵抗感を軽減することを自身がおこなった研究結果をもとに展開した。リスニング自己効力感においては、シャドーイング指導を繰り返し行うことで、学習者が英語を聞き取れることに対しての自信をつけ、教室外でも英語のリスニングを継続的に行うことを報告した。同様に、リスニングに対する不安も、シャドーイング指導を用いることで軽減されることを統計的分析をおこなった上で述べた。

第10章では、第二言語習得における自己モニタリングに関する主要な先行研究を概観している。自己モニタリングの理論をシャドーイング指導に反映した指導例や実証的データを紹介し、シャドーイング指導における自己モニタリングの困難さと重要性の両方を論じた。

第12章において、シャドーイング指導が日本人大学生の発音の理解のしやすさとリスニング力を向上させるかの検証報告をおこなった。本実験では、週1回約15分間のシャドーイング指導を合計13回実施した。その結果、参加者の超分節における発音の理解のしやすさは統計的に有意な差を持って向上したことが確認された。一方で、分節と全体の理解のしやすさにおいては有意な差は確認できなかった。この結果を考察するにあたり、シャドーイング指導は実施する際に認知的負荷が高いことに着目した。認知負荷が高い故に、参加者はシャドーイングを行う際に、英語の子音や母音の音に対して注意資源が及ばない可能性を先行研究から推察した。そのため、今後の指導においては、シャドーイング単独ではなく、その他のオフラインの性質を持つ指導法を統合する必要性に関して述べた。

Study1の結果を受けて、第13章にてStudy2の執筆をおこなった。Study1では指導の結果、超分節における発音の理解のしやすさは統計的に有意な差を持って向上したことが確認されたが、分節と全体の理解のしやすさにおいては有意な差は確認できなかった。その理由として、シャドーイング指導を行う際、学習者の注意資源が分節的特徴に十分割り当てることができなかったことが考えられる。シャドーイング指導はそのオンライン的性質がゆえ、完璧に行うことが難しい。そのため、他のオフライン的性質を持つ指導法と組み合わせる方がよりその効果が発揮されるとされている(Mori, 2011)。そのため、Study2では、シャドーイングと音読を組み合わせた指導が、日本人英語学習者の英語発音における理解のしやすさを向上させるかを検証した。音読は学習者自身のペースで発音が行えるオフラインの指導法であるため、シャドーイングの弱点を補足できる指導法だと予想された。日本人大学生に対して週1回約15分間のシャドーイング指導と音読を組み合わせた指導を合計13回実施した。その結果、参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさの3つの評価観点において統計的に有意な差が確認された。その上、実験参加者のリスニング力を向上させた。

第14章では、シャドーイング指導法と発音認識アプリを組み合わせた指導法が参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさを向上させるかを検証した。本研究で導入したアプリは音読メーターという発音認識アプリで、無料で誰でもスマートフォンを用いれば利用可能である。このアプリでは、学習者がどの発音が正しくできていないかが可視化される。また、音読のパフォーマンスをスコア化できる。そのため、シャドーイング指導を通して発音を練習した後に、本アプリを使用することによって客観的に自らの発音を確認できる。本研究では、シャドーイング指導法と発音認識アプリを組み合わせた指導法が参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさを向上させるかを検証すると同時に、指導後実験参加者が本指導をどのように感じたのかに関するアンケートを実施した。日本人大学生に対して週1回約20分間のシャドーイング指導と音読メーターを組み合わせた指導を合計13回実施した。その結果、参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさの3つの評価観点において統計的に有意な差が確認された。また、アンケートの結果をKHコーダーを用いて分析した。その結果、参加者は自らの発音を確認できることで、英語独自の発音的特徴を捉えることができ、発音に対する自信をつけたことが分かった。

最後に第15章において、本論文のまとめや限界点、ならびに今後の研究の方向性や展望を述べて、本博士論文を結んだ。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (新本 庄悟)			
論文審査担当者	(職)		
	氏 名		
	主 査	教 授	岩居 弘樹
	副 査	教 授	森 祐 司
	副 査	教 授	小口 一郎

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の英語授業において、シャドーイング指導を基軸とし、日本人英語学習者の発音の理解のされやすさ (comprehensibility) を高める指導法を開発することを目的としている。

本論文は全15章で構成されている。第1章第2章では、外国語教育における指導法の歴史、流れや各指導法の種類を概観し、言語形式を反復練習によって身につけるオーディオ・リンガル指導法から、実際に英語を使用しながら実践的に言語習得を行うタスク中心の指導法や英語以外の教科を英語で学ぶCLILなどについて説明をおこなった。また第2章の後半では、現在の発音指導に焦点を充て、外国語で問題なくコミュニケーションを行えることが、外国語学習の究極の目標とされていることに触れている。先行研究では、どれだけ早期に学習を開始しても第一言語の訛りが全く無い第二言語話者はまれであることが分かっており、訛り度合いを消すことは非常に困難であるが、一方で聞き取りやすさを高めることは十分に可能であるという見解も見られる。しかし、聞き取りやすい英語でコミュニケーションを図ることの重要性が指摘されているにも関わらず、日本の英語教育の現場では時間的な制約や指導者側の発音指導への自信の無さなどから発音指導が軽視されていることを述べた。

第3章では、世界の英語母語話者は非英語母語話者と比較すると圧倒的に少ないという現実から、日本のような外国語環境においては、訛りのない英語ではなく聞き取りやすい英語を目標とすべきであることを先行研究を引用しながら強調している。

第4章では、理解されやすい発音を構成する諸要素を詳細に論じ、第5章では、発音に関する評価方法について先行研究などを引用し要約した。日本における従来の発音の測定は、旧大学入学センター試験によく見られた発音記号やアクセント問題であることに触れ、その評価方法では実際の英語発音を測れない事について述べた。それに加えて、現代のテクノロジーの発展を受け、発音評価の自動採点化についても言及している。

第6章では、英語のどのような言語特徴が理解のされやすさに影響を与えるかの先行研究を概観し、第7章から8章では、聞き取りやすい英語の発音を高める指導法の一つとして、シャドーイングが挙げられることを論じている。シャドーイングとは、聞こえてくる音声を即座に口頭で再生する方法で、その即時性から「オンライン」の指導法だと言われている。一方で、聞こえてきた音声を一旦聞いた後に間を置いて自分のペースで口頭再生するリピートイングと呼ばれる指導法は「オフライン」の指導に分類される。シャドーイングを実施する際は、この即時的性質から発話者が内面に保有している発音データベースを介することなく、生の英語の音声を発することになる。そのため、このシャドーイング指導法が聞き取りやすい発音力向上に寄与すると考えられることを示し、シャドーイングは教室内において導入しやすい指導法であり、教師側の負担がほとんどないと論じている。

第9章では、シャドーイング指導が学習者の心理的側面に与える影響について、先行研究および著者自身が行った研究結果をもとに報告している。シャドーイング指導は学習者のリスニングに対する自己効力感を高め、リスニングに対する不安やスピーキングに対する抵抗感を軽減する。リスニング自己効力感においては、シャドーイング指導を繰り返す行うことで、学習者が英語を聞き取れることに対しての自信をつけ、教室外でも英語のリスニングを継続的に行うようになる。またリスニングに対する不安も、シャドーイング指導を用いることで軽減されることを統計的に分析している。

第10章では、自己モニタリングの理論をシャドーイング指導に反映した指導例や実証データを紹介し、シャドーイング指導における自己モニタリングの困難さと重要性を論じ、以下の検証へ展開する。

第11章で第12章以下に記述する3つの実証研究の目的を述べたのち、第12章ではシャドーイング指導が日本人大学生の発音の理解のしやすさとリスニング力を向上させるかの検証をおこなった（Study 1）。本実験では、週1回約15分間のシャドーイング指導を合計13回実施した。その結果、参加者の超分節音の発音の理解のしやすさは統計的に有意な差を持って向上したことが確認された。一方で、分節音と全体の理解のしやすさにおいては有意な差は確認できなかった。この結果を考察するにあたり、シャドーイング指導は実施する際に認知的負荷が高いことに着目した。認知負荷が高い故に、参加者はシャドーイングを行う際に、分節音である子音や母音に対して注意資源が及ばない可能性を先行研究から推察した。そのため、今後の指導においては、シャドーイング単独ではなく、その他の「オフライン」の性質を持つ指導法を統合する必要性に関して述べた。

シャドーイング指導はその「オンライン」的性質がゆえの困難さを伴うため、他の「オフライン」的性質を持つ指導法と組み合わせた方がよりその効果が発揮されることは、先行研究においても示唆されている。そこで第13章では、シャドーイングと音読を組み合わせた指導が、日本人英語学習者の英語発音における理解のしやすさを向上させるかを検証した（Study 2）。音読は学習者自身のペースで発音が行える「オフライン」の指導法であるため、シャドーイングの弱点を補足できる指導法だと予想された。日本人大学生に対して週1回約15分間のシャドーイング指導と音読を組み合わせた指導を合計13回実施した。その結果、参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさの3つの評価観点において統計的に有意な差が確認され、実験参加者のリスニング力を向上させたと述べている。

第14章では、シャドーイング指導法と自己モニタリングを組み合わせた指導法が参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさを向上させるかを検証した（Study 3）。高度な認知的過程を含み、学習者にはしばしば困難な自己モニタリング特有の問題を回避するため、ここでは音読メーターという発音認識アプリを活用している。このアプリでは、学習者がどの部分の発音が正しくないかが可視化され、音読のパフォーマンスをスコア化できる。そのため、シャドーイング指導を通して発音練習した後に、本アプリを使用することによって自らの発音を客観的に確認でき、自己モニタリングが容易に行える。Study 3では、発音認識アプリの利用により、シャドーイングと自己モニタリングを組み合わせた指導法が参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさを向上させるかを検証すると同時に、指導後実験参加者がこの指導法をどのように感じたのかに関するアンケートを行った。この実験では、日本人大学生に対して週1回約20分間のシャドーイング指導と音読メーターを組み合わせた指導を合計13回実施した。その結果、参加者の分節音、超分節的特徴、理解のしやすさの3つの評価観点において統計的に有意な差が確認された。また、アンケートの結果をKHコーダーを用いて分析し、参加者は自らの発音を確認できることで、英語独自の発音的特徴を捉えることができ、発音に対する自信をつけたことが明らかとなったと述べている。

最後に第15章において、本論文のまとめや限界点、ならびに今後の研究の方向性や展望を述べている。

このように、本論文は、発音指導における課題を詳細に検討し、シャドーイング指導が日本人の英語発音における理解のされやすさ（comprehensibility）を向上させること、シャドーイングを単独で実施するよりも、「オフライン」の性質を持つ別の指導法を併せて導入することが効果的であることを実証したという点で非常に有益な示唆をもたらすものと考えられる。その一方で、今回の実験対象者の数が限られているという点、Study 1, 2 と Study 3対象者のTOEICレベルに差がある点、中上級者でも同様の効果があるかといった課題も残されており、評価者の日本滞在期間の長さが理解のされやすさ（comprehensibility）の判定に影響を与える可能性があるのではないかなどという点も検討が必要である。加えて、シャドーイング単独の場合と音読単独の場合、音読とシャドーイングを組み合わせた場合の効果についても比較検討が必要であると考えられる。また、充実した文献研究が行われている一方で、実証研究との有機的な連関が必ずしも明示しきれていないことも課題である。しかしながらこうした点は本論文の価値を減じるものではなく、全体として有意義な貢献をなす意欲的な研究であると評価できる。

以上のように、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。